

半七捕物帳

朝顔屋敷

岡本綺堂

青空文庫

「安政三年……十一月の十六日と覚えています。朝の七ツ（午前四時）頃に神田の柳原堤どての近所に火事がありましたね。なに、四、五軒焼けで済んだのですが、その辺に知っている家うちがあつたもんですから、薄っ暗いうちに見舞に行つて、ちつとばかりおしやべりをして家へ歸つて、あさ湯へ飛び込んで、それからあさ飯を食つてみると、もうかれこれ五ツ（午前八時）近くになりましたろう。そこへ八丁堀の榎原という旦那（同心）から使が来て、わたくしにすぐ来いと云うんです。朝っぱらから何だろうと思つて、

すぐに支度をして出て行きました」

半七老人は表情に富んでいる眼眦めじりを少ししかめて、その当時のさまを眼に浮かべるように一と息ついた。

「旦那の家は玉子屋新道で、その屋敷の門をくぐると、顔馴染の徳蔵という中ちゆうげん間まが玄関に立っていて、旦那がお急ぎだ、早くあがれと云うんです。すぐに奥へ通されると、旦那の榎原さんと差し向いで、四十格好の人品の好いお武家が一人坐っていました。その人は裏四番町に屋敷をもっている杉野という八百五十石取りの旗本の用人で、中島角右衛門という名札なふだをわたくしの前に出しましたから、こつちも式かたのごとくに初対面の挨拶をしています、榎原の旦那は待ち兼ねたように云うんです。実はこの方から内々

のお頼みをうけた筋がある。なにぶん表沙汰にしては工合ぐあいが悪いので、どこまでも内密に探索して貰いたいとおっしゃるのだから、あなたから詳しい話をうかがって、節季せつき前に気の毒だが一つ働いてくれと……。わたくしも御用のことですから委細承知して、その角右衛門という人の話を聞くと、そのあらまはこういう訳なんです」

きょうから八日前のことであった。例年の通りに、お茶の水の聖堂で素読吟味そどくぎんみが行なわれた。素読吟味というのは、旗本御家人の子弟に対する学問の試験で、身分の高下を問わず、武家の子弟が十二三歳になると、一度は必ず聖堂に出て四書五経の素読吟味

を受けるのが其の当時の習慣で、この吟味をとどこおりなく通過した者でなければ一人前とは云われない。吟味の前月までに組々の支配頭へ願書を出しておく、当日五ツ半（午前九時）までに聖堂に出頭せよという達たつしがある。それを受け取った何十人、年によつては何百人の男の児が、当日打ち揃つて聖堂の南楼へ出て、林はぎしよのかみ図書頭をはじめとして諸儒者列席の前に一人ずつ呼び出され、一間半もある大きい唐からづくえ机の前に坐つて素読の試験を受けるのである。成績優等のものに対しては、身分に応じて反物や白銀の賞与が出た。

出頭の時刻は五ツ半というのであるが、前々からの習慣で、吟味をうける者は六ツ時（午前六時）頃までに聖堂の門にはいるの

を例としていたので、屋敷の遠い者は夜のあけないうちから家を出て行かなければならない。そうして、いよいよ吟味のはじまる四ツ時（午前十時）まで待つていなければならぬ。たとい武家の子供だと云つても、ちようど十二三のいたずら盛りが大勢一度に寄り合うのであるから、控え所のさわぎは一と通りでないのを、勤番支配の役人どもが叱つたり賺すかしたりして辛くも取り鎮めているのである。子供たちは身分に應じて羽二重の黒紋付の小袖を着て、御目見おめみえ以上の家の子は継つぎがみしも、御目見以下の者は普通の麻あしを着けていた。

角右衛門の主人の伴杉野大三郎もことし十三で吟味の願いを出した。大三郎は組中でも評判の美少年で、黒の肩衣かたぎぬに萌黄もえぎの袴

という継

を着けた彼の前髪姿は、芝居でみる忠臣蔵りきやの

ように美しかった。たいしん大身の子息であるから、かれは山崎平助と

いう二十七歳のちゆうごしやう中小姓と、又蔵という中間とを供につれて出

た。裏四番町の屋敷を出たのは当日の七ツ（午前四時）を少し過ぎた頃で、尖った寒さは眼に沁みるようであった。又蔵は定紋付きの提灯をふり照らして先に立った。三人の草履は暁の霜を踏んで行った。

水道橋を渡っても、冬の夜はまだ明けなかった。蒼ざめた星が黒い松の上に凍り着いたように寂しく光って、鼠色の靄につつまれたお茶の水の流れには水明かりすらも見えなかった。ここらどては取り分けて霜が多いと見えて、高い堤の枯れ草は雪に埋められた

ように真つ白に伏して、どこやらで狐の啼く声聞きこえた。三人は白い息を吐きながら堤に沿うてのぼつてくると、平助は霜にすべる足を踏みこらえるはずみに新らしい草履の緒を切つてしまつた。

「これは困つた。又蔵、燈火あかりを見せてくれ」

中間の提灯を差し付けさせて、平助は堤の裾にしゃがんで草履の緒を立てていた。どうかにかこうにかつくろつてしまつて、さて振り返つて見ると、そばに立っているはずの大三郎の姿がどこかへか消えてしまったのである。二人はおどろいた。子供のことであるから、あるいは自分たちを置き去りにして先に行つたのかとも思つたので、二人は若さまの名を呼びながら後を追つたが、半

町ほどの間にそれらしい影は見えなかった。いくら呼んでも返事はなかった。ただ時々狐の声がきこえるばかりであった。

「狐に化かされたんじやあるまいか」と、又蔵は不安らしく云つた。

「まさか」と、平助はあざ笑つた。しかし彼にもその理窟が判らなかつた。自分がうづくまつて草履の鼻緒を立て、又蔵がうつむいて提灯をかざしているうちに、大三郎の姿はいつか消え失せたのである。わずかの間にそんなに遠いところへ行つてしまう筈がない。呼んでも答えない筈がない。殊にあたりは往来のない^{あけが}曉方であるから、誰かがこの美少年をさらつて行つたとも思われない。平助は実に思案に余つた。

「そう云つても子供のことだ。あんまり寒いので無暗に駈け出して行つたのかも知れない」

二人はここに迷つていてもしようがないので、ともかくも聖堂まで急いで行つた。係りの役人に逢つて訊いてみると、杉野大三郎どのはまだ到着されないとのことであつた。二人は又がっかりさせられた。よんどころなく再び引つ返して、もと来た道を探して歩いたが、どこにも大三郎の姿は見付からなかつた。

「いよいよ狐に化かされたか。それとも神隠しか」と、平助もだんだんに疑いはじめた。

この時代には神隠しということが一般に信じられていた。子供ばかりではない、相当の年頃になつた人間でも、突然に姿をかく

して五日、十日、あるいは半月以上、長いのは半年一年ぐらいも其のゆくえの知れないことがしばしばある。そうして、ある時に何処からともなしに飄然と戻つて来るのである。その戻つてくる場合も常とは違つて、ある者は門前に倒れているものもある。ある者は裏口にぼんやり突つ立っているものもある。甚だしいのは屋根の上でげらげら笑っているものもある。だんだん介抱して様子を聞きただしても、本人は夢のようでなんにも記憶していないのが多い。ある者は奇怪な山伏に連れられて遠い山奥へ飛んで行つたなどと云う。その山伏はおそらく天狗であろうと云い伝えられている。仮りにも武士たるものがそんな怪異を信ずべきではないと思ひながら、平助も今の場合、あるいは主人の息子もその天狗山伏

に掴み去られたのではないかという幾分の不安がきざして来た。

いずれにしてもこれは一大事である。幼い主人の供をして出て、そのゆくえを見失つたとあつては、二人ともにおめおめと屋敷へは戻られない。又蔵はともあれ、仕儀に依つては平助は申し訳に腹でも切らなければならぬことになる。二人は顔の色を変えてただ溜息をつくばかりであつた。

「仕方がない。屋敷へ歸つて有ありてい体に申し上げるよりほかはあるまい」

平助はもう度胸を据えて、又蔵と一緒に引つ返した。先刻から往きつ戻りつ、よほどの時を費したので、二人が力のない足を引き摺つて再び水道橋を渡る頃には、又蔵の提灯の蠟はもう残り少

なくなっていた。狐の声は鴉の声に変わっていた。

杉野の屋敷でもこの不思議な報告を受け取って上下ともに顛倒した。併しמידりにこんなことを世間に発表してはならぬと、主人の大之進は家中の者どもの口を封じさせた。聖堂の方へは大三郎急病の届けを差し出して、当日の吟味を辞退することにした。

平助と又蔵は無論にその不調法をきびしく叱られたが、主人は物の分かった人であるので、この不調法の家来どもに対して一途いちぢずにひどい成せい敗ばいを加えようとはしなかった。二人に対しては、せいぜい心をつけて一日も早く俵のゆくえを探し出せと命令した。

これは云うまでもないことで、平助と又蔵とは当然の責任者として、是非とも若殿のゆくえを探し出さなければならなかった。

彼等ばかりでなく、屋敷中の者はみんな手分けをして心当りを探索することとなった。奥様は日頃信仰する市ヶ谷八幡と氏神の永田町山王へ代参を立てられた。女中のある者は名高い売卜者うらなひのところへ走った。表面はあくまでも秘密を守っているものの、屋敷の内輪は引っくり返るような騒動であった。こうして三日を過ぎ、五日を送ったが、美少年大三郎のゆくえは容易に知れなかつた。主人も家来も今は手の着けようがなくなつたので、とても内輪の探索だけでは埒があかないと見た用人の角右衛門は、今朝そつと八丁堀同心の榎原の屋敷へたずねて来て、どうにか内密に調べてはくれまいかと折り入って頼んだのであつた。

「なにぶんにも屋敷の名前にもかかわること。くれぐれも隠密に

おねがい申す」と、角右衛門は幾たびか念を押した。

「かしこまりました」

半七は参考のために大三郎の人相や風俗を訊いた。あわせてその性質や行状をたずねると、彼は五歳から手習いを始めて、七歳から大学の素読を習った。読み書きともに質たちのよい方で、現に今度の吟味にも四書五経いずれも無点本でお試しにあずかりたいという願書を差し出した程であると、角右衛門は自慢そうに話した。併しその口ぶりによると、大三郎はそういう質の子供に免がれがたい文弱の傾向があるらしかった。容貌も優しいとともに、その性質も優しい柔順な人間であるらしかった。

「御子息様には御兄弟がございませんか」

「ひと粒だねの相続人、それゆえに主人は勿論、われわれ一同もなおなお心配いたして居る次第、お察しください」

忠義な用人の眉はいよいよ陰った。

二

神隠し——この時代に生まれた半七はまんざらそれを嘘とも思っていないかった。世の中にはそんな不思議がないとも限らないと思っていた。そこで、それが真実の神隠しであるとすれば、とてもし自分たちの力には及ばないことであるが、万一ほかに仔細があるとすれば、何とかして探し当らない筈はないという自信もある

ので、ともかくも出来るだけのことは致しますと、彼は角右衛門に約束して別れた。

家へ帰る途中で彼はかんがえた。由来、旗本屋敷などには、世間に洩れない、いろいろの秘密がひそんでいる。正直に何もかも話してくれたようであるが、用人とても主家の迷惑になるようなことは口外しなかつたに相違ない。したがって此の事件の奥には、どんな入り組んだ事情がわだかまっていなとも限らない。用人の話だけでうっかり見込みを付けようとする、飛んだ見当違いになるかも知れない。とりあえず裏四番町の近所へ行つて、杉野の屋敷の様子を探つて来た上でなければ、右へも左へも振り向くことが出来そうもないと思つたので、半七は神田の家へ一旦帰つ

て、それから又出直して九段の坂を登った。

埋め立ての空地を横に見て、裏四番町の屋敷町へはいると、杉野の屋敷は可なり大きい構えで、午すぎの冬の日には南向きの長屋窓を明るく照らしていた。門から出て来た酒屋の御用聞きをつかまえて、半七はそれとなく屋敷の様子を訊いてみたが、別に取り留めた手がかりもなかった。近所の火消し屋敷に知っている者があるので、そこへ行って訊き出したら又なにかの掘り出し物があるかも知れないと、彼は酒屋の御用聞きに別れて七、八間ばかり歩き出すと、その隣りの大きい屋敷から さげしゅう提重 を持った若い女が少し紅い顔をして出て来た。

「おい、お六じゃねえか」

半七に声をかけられて、若い女は立ち停まった。背の低い肥つた女で、ひきがえる 蝦蟆のような顔に白粉をべたべたなすつて、前髪にあかい布きれなどをかけていた。

「あら、三河町の親分さんでしたか。どうもしばらく」と、お六はいやに嬌態しなをつくりながら挨拶した。

「昼間から好い御機嫌だね」

「あら」と、お六は袖口で頬を押えながら笑った。「そんなに紅くなっていますか。今ここのお部屋で無理に茶碗で一杯飲まされたもんですから」

彼は武家屋敷の中間部屋へ出入りをする物売りの女であった。かれの提げている重箱の中には鮓すしや駄菓子すしのたぐいを入れてある

が、それを売るばかりが彼等の目的ではなかつた。勿論、美しい女などは決していない。夜鷹になるか、提重になるか、いずれにしても不器量の顔に紅べにや白粉を塗つて、女に飢えている中間どもに媚こびを売るのが彼等のならわしであつた。ここで提重のお六に出逢つたのは勿怪もつげの幸いだと思つたので、半七は摺り寄つて小声で訊いた。

「お前、この杉野様の部屋へも出入りをするんだろう」

「いいえ。あたし、あのお屋敷へは一度も行つたことはありませんよ」

「そうか……」と半七は少し失望した。

「だって、あすこは名代なだいの化け物屋敷ですもの」

「ふうむ。あすこは化け物屋敷か」と、半七は首をかしげた。

「そうして、あの屋敷へ何が出る」

「なにが出るか知りませんが、いやですわ。ここらで朝顔屋敷といえれば誰でも知っていますよ」

朝顔屋敷——その名を聞いて半七は思い出した。それは杉野の屋敷であるかどうかは知らなかったが、四番町辺に朝顔屋敷という怪談の伝えられていることは、彼もかねて聞いていた。皿屋敷、朝顔屋敷、とかくに番町に化け物屋敷のようなものが多いのは、この時代の名物であつた。世間の噂によると、朝顔屋敷の遠い先代の主人がなにかの仔細で妾を手討ちにした。それは盛夏のまなつことで、その妾は朝顔の模様を染めた浴衣を着ていたとかというので、

その以来、朝顔が不思議にこの屋敷に崇たるのであった。広い屋敷内に朝顔の花が咲くと、必ずその家に何かの凶事があるというので、夏から秋にかけては中間どもが屋敷の庭から裏手の空地まで毎日油断なく見まわって、朝顔夕顔のたぐい、仮りにも花の咲きそうな蔓をみると片つ端から引き抜いてしまうことになっている。朝顔の絵をかいた団扇うちわを暑中見舞に持って来たために、出入りを差し止められた商あきんど人もあるという。そんな話は半七もとうに知っていたが、それが杉野の屋敷であることは初耳であった。

「そうか。あすこが朝顔屋敷か」

「外からはいった者にどういうこともないでしょうけれど、昔から化け物屋敷と名のついている屋敷へ出入りするの、なんだか

気味が悪うござんすからね」と、お六は顔をしかめて見せた。

「それもそうだな」

云いかけてふと見かえると、その朝顔屋敷の表門から一人の武むら士らいが出て来て、九段の方角へしずかにあるいて行つた。武家の中小姓とでもいいそうな風俗であつた。

「お前、あの人を知らねえか」と、半七は頤で示してお六に訊いた。

「口を利いたことはありませんけれど、あの人は何んでも山崎さんというんですよ」

中小姓の山崎平助に相違ないと半七はすぐに鑑定したので、彼はお六に別れてそのあとを追つて行つた。往来の少ない屋敷の堀

の外で、彼はうしろから平助に声をかけた。

「もし、もし、失礼でございますが、あなたは杉野様のお屋敷の方じゃございませんか」

「左様」と武士は振り返って答えた。

「実はけさほどお屋敷の御用人様にお目にかかりましたが、お屋敷では御心配なことが出しゅつたい来たいしましたそうで、お察し申し上げます」

相手は油断しないような顔をしてこちらを睨んでいるので、半七は用人の角右衛門に逢ったことを話した。そうして、あなたは山崎さんではないかと訊くと、彼はそうだと答えた。それでもまだ不安らしい眼の色をやわらげないで、彼は自分と向い合ってい

る岡つ引の顔をきつと見つめていた。

「若殿様のゆくえはまだちつとも御心当りはございませんか」

「一向に手がかりがないので困っています」と、平助は詞ことばすくなに答えた。

「神隠しとでも云うんじやございますまいか」

「さあ、そんなことが無いとも限らない」

「そういうことだと、とても手の着けようもありませんが、ほかにはなんにも心当りはないんでしょうか」

「なんにもありません」

半七は畳みかけて二つ三つの問いを出したが、平助はとにかくに木で鼻をくくるような挨拶をして、努めて相手との問答を避けて

いるらしい素振りが見えた。用人の角右衛門は頭を下げてくれぐれも半七に頼んだのである。まして自分は当の責任者である以上、平助は猶更にこの半七を味方と頼んで、万事の相談や打ち合わせを自分から進めそうなものであるのに、彼はいつまでも油断しないような眼付きをして、なるべく口数をきかないように努めているのは何故であろう。それが半七には判らなかつた。まかり間違えば腹切り道具のこの事件に対して、彼がこんなに冷淡に構えているのを、半七は不思議に思いながら、もう一度この男の顔を見直した。

平助は二十六七の、どちらかと云えば小作りの、色の白い、眼付きの涼しい、屋敷勤めの中小姓などには有り勝ちの、いかにも

小賢こざかしげな人物であつて、自分の供をして出た主人を見失つて、それで平気で済ましていられるような鈍にぶい人間でないことは、多年の経験上、半七には一と目で判つていた。それだけに半七の不審はいよいよ募つて来た。

「今も申し上げました通り、もし本当の神隠しならば格別、さもなければきつとわたくしが探し出して御覧に入れますから、まあ御安心くださいまし」と、半七は搜索さぐりを入れるようにきつぱりとかう云い切つた。

「では、なにかお心当りでもありませんか」と、平助は訊き返した。「さあ、さし当りこうという目星も付きませんが、わたくしも多年御用を勤めて居りますから、まあ何とか致しましょう。生きて

いるものならきつと何処かで見付かります」

「そうでしようか」と、平助はまだ打ち解けないような眼をしていた。

「これからどちらへ……」

「どこという的あてもないが、ともかくも江戸じゆうを毎日歩いて、一日も早く探し出したいと思つているので……。お前さんにも何分たのみます」

「承知いたしました」

半七に別れてすたすた行き過ぎたが、平助は時々立ち停まつて、なんだか不安らしくこちらを見返つているらしかった。その狐のような態度がいよいよ半七の疑いを増したので、彼はすぐに

平助のあとを尾けようかと思つたが、真つ昼間では工合ぐあいが悪いので先ず見合わせた。

三

これからどつちへ爪先を向けようかと半七は横町の角に立ち停まつて考えていると、たつた今別れたばかりのお六がほかの女と二人づれで、その横町からきやつきやつと笑いながら出て来た。

「おや、又お目にかかりましたね」と、お六はやはり笑いながら声をかけると、連れの女も黙つて会えしやく釈やくした。

「御縁があるね」と、半七も笑つた。

お六の連れは十七八のすらりとした女で、これも同じような提重を持つていた。口くちわた綿わたらしい双子ふたごの着物の小ぎつぱりしたのを着て、結ゆい立てらしい彼女の頭にも紅い絞りの切れが見えた。鼻の低いのをきずにして、大体の目鼻立ちはお六よりも余ほどすぐれていた。

「親分さん。この安ちゃんが朝顔屋敷のお出入りなんですよ」と、お六はからかうように笑いながら、連れの女の背中をたたいた。

「あら、いやだ」と、女も肩をすくめて笑った。

「姐ねえさんは何というんだね」

「安ちゃん……。お安さんというんです」と、お六はその女の手をとって、わざとらしく半七の前に突き出した。「親分さん、ち

つと叱つてやってく下さい。惚のろけてばかりいて仕方がないんですから」

「あら、嘘ばっかり。ほほほほほほ」

いかに人通りの少ない屋敷町でも、往来のまん中で提重の惚気を聴かされては堪らないと、半七も怖毛おそけをふるつた。しかし今の場合、かれも度胸を据えて其の相手にならなければならぬと覚悟した。

「なにしろお楽しみだね。で、その惚気の相手というのはやっぱり朝顔屋敷にいるのかえ」

「いるんですと」と、お六はすぐに引き取つて答えた。「お部屋にいる又蔵さんという小粋あにいな兄さんなんですよ」

又蔵という名が半七の胸にひびいた。

「むむ。又蔵か」

「お前さん、御存じですかえ」と、お安は少しきまり悪そうな顔を
をして訊いた。

「まんざら知らねえこともねえ」と、半七は調子をあわせて云つた。
「だが、あの男はなかなか道楽者らしいから、欺だまされねえよ
うに用心しねえよ」

「ほんとうにそうですよ」と、お安は真面目まじめになつてうなずいた。

「この暮には着物をこしらえてやるなんて、好い加減に人を欺く
らかしているんですよ。お前さん。節季せつきはもう眼の前につかえて
いるんじゃないませんか。春着をこしらえるなら拵せえるように、

せめて手付けの一両ぐらいこつちへ預けて置いてくれなけりやあ、どこの呉服屋へ行つたつて話が出来ませんよ。それをあした遣^やるの、あさつて渡すのと口から出任せのちやらつぽこを云つて、好いように人をはぐらかしているんですもの。憎らしいつちやありません」

飛んでもない怨みを云われて、半七はいよいよ持て余したが、それでもやはり笑いながら其の相手になつていた。

「まあまあ、堪忍してやるさ。そう云つちやあ何だけれど、一年三両の給金取りが一両、二両の工面^{くめん}をすると云うのは大抵のことじゃあねえ。お前さんも可愛い男のことだ。そこを察してやらにやあ邪慳^{じゃけん}だ」

「だって、又さんの話じゃあ、なんでも近いうちに纏まったお金がふところへはいると云うんですもの、こつちだつて的あてにしようじゃありませんか。それとも嘘ですかしら」

「そう訊かれても返事に困るが、あの男のことだから丸つきりの嘘でもあるめえ。まあ、もう少し待つてやることさ」

受け太刀に困つている半七を、お六が横合いから救い出してくれた。

「まあ、安ちゃん。もう好い加減におしよ。親分さんが御迷惑だあね。又さんのことはあたしが受け合うから安心しておいでよ」

それを機しおに半七は逃げ支度にかかった。相手が相手だけに、まさか無愛嬌に別れるわけにも行かないので、半七は紙入れから二

朱銀を出して、紙にくるんでお六に渡した。

「少しだが、これで蕎麦でも食つてくんねえ」

「おや、済みません。どうも有難うございます」

二人が頻りに礼をいう声をうしろに聞き流して、半七は早々にそこを立ち去った。なんだか落ち着かないような平助の眼の色と、近いうちにまとまった金があるという又蔵の噂と、朝顔屋敷の怪談と、半七はこの三つを結びあわせていろいろに考えたが、すぐには取り留めた分別も浮かび出さなかつた。彼はふところ手をしてぼんやりと九段の坂を降りた。

家へ帰つて長火鉢のまえに坐つて、灰を睨みながらじつと考えているうちに、冬の短い日はもう暮れかかった。半七は早く夕飯

を食って、九段の長い坂をもう一度あがって、裏四番町の横へはいると、どこの屋敷の藁いらかもゆうぐれの寒い色に染められて、呪のろいの伝説をもっている朝顔屋敷の大きな門は空屋のように閉まっていた。半七は門番のおやじにそつと声をかけて訊いた。

「お部屋の又蔵さんはいますかえ」

又蔵はたった今、門番にことわって表へ出たが、きつと近所の藤屋という酒屋へ飲みに行ったのであろうとのことであった。中小姓の山崎さんとは訊くと、これも昼間出たぎりでもまだ帰らないと門番が教えてくれた。半七は礼を云って表へ出ると、路の上はすつかり暗くなって、遠い辻番の蠟燭の灯が薄紅くにじみ出していた。藤屋という酒屋を探しあてて、表から店口を覗いてみると、

小皿の山^{さんしよ}椒をつまみながら榊酒を旨そうに引っかけている一人の若い中間風の男があつた。

半七は手拭を出して頬かむりをした。店の前に積んである薪^{まき}のかげに隠れて、男の様子をしばらく窺っていると、彼は番頭を相手に何か笑いながらしやべっていたが、やがて勘定を払わずにそこを出た。

「今夜は頼むよ。その代り二、三日中にこのあいだの分も一緒に利をつけて返さあ。はははははは」

彼はもう余ほど酔っているらしく、寒い夜風に吹かれながら好い気持そうに鼻唄を歌って行つた。半七も草履の音を忍ばせて、そのあとを尾^つけてゆくと、彼は自分の屋敷へは帰らないで、九段

の坂上から旗本屋敷の片側町を南へぬけて、千鳥ヶ淵の淋しい堀端の空地へ出た。見ると、そこには又一人の男がたたずんでいる。白い影が、向う側の高い堤の松の上にちようど今、青白い顔を出した二十六日の冬の月にあざやかに照らされていた。眼のさとい半七はそれが彼の山崎平助である事をすぐに覺さとつた。ここで二人が落ち合つてどんな相談をするのであろう。こういう時には、月の明るいのが便利でもあり、また不便でもあるので、半七は彼等の立っている空地と向い合つた大きい屋敷の前へ忍んで行つた。門前の溝とどぶが空溝であることを知っている彼は、狗いぬのように腹這いながらそつとその溝へもぐり込んで、駒寄せの石のかけに顔をかくして、二人の立たちばなし談だんに耳を引き立てていた。

「山崎さん。たった二歩^ふじゃあしようがねえ。なんとか助けておくんなせえ」

「それが^{あぶみ}鎧踏ん張り精いっぱいというところだ。一体このあいだの五両はどうした」

「火消し屋敷へ行つてみんな取られてしまいましたよ」

「博奕は止せよ。路^{みちばた}端の竹の子で、身の皮を剥^むかれるばかりだ。馬鹿野郎」

「いやもう、一言もありません。叱られながらこんなことを云つちやあ何ですが、お前さんも御承知のお安の阿魔、あいつにこの間から春着をねだられているんで、わっしも男だ、なんとか^{くめん}工面してやらなけりやあ」

「ふふん、立派な男だ」と、平助はあざ笑った。「春着でも仕着しきせでもこしらえてやるがいいじゃあねえか」

「だから、その、なんとか片棒かっいでお貰い申したいので……」
「ありがたい役だな。おれはまあ御免だ。おれだって知行取りじやあねえ。物前ものまえに人の面倒を見ていられるもんか」

「お前さんにどうにかしてくれと云うんじやあねえ。お前さんから奥様をお願い申して……」

「奥様にだつてたびたび云われるものか、このあいだの一件は十両で仕切られているんだ。それを貴様と俺とが山分けにしたんだから、もう云い分はねえ筈だ」

「云い分じやあねえ。頼むんですよ」と、又蔵はしつこく口説い

た。「まあ、何とかしておくんなせえ。女に責められて全く遣り切れねえんだから。お前さんだつて、まんざら覚えのねえことでもありませんめえ。ちつとは思いやりがあつても好いじやありませんか」

相手が黙つて取り合わないので、又蔵も焦れ出したらしい。酔つている彼の調子は少し暴あくなつた。

「じゃあ、どうしてもいけねえんですかえ。もうこうなりや仕方がねえ。御用人がけさ八丁堀へ出かけたということだから、わつしもこれから八丁堀へ行つて、若殿様はこういうところに……」

「嚇かすな」と、平助はまたあざ笑つた。「両国の百おでこ日芝居で覚えて来やあがつて、乙な啖呵を切りやあがるな。そんな文句は

ほか様へ行つて申し上げろ。お気の毒だが辻番が違うぞ」

まだ宵の口ではあるが、世間がひつそりと鎮まつているので、こうした押し問答が手に取るように半七の耳に伝わった。いずれこの納まりは平おだやか穩かに済むまいと見ていると、それから二人のあいだに尖つた声が交換されて、しまいには二つの影がもつれ合つて動き出した。口では敵かなわない又蔵がとうとう腕うでずくの勝負になつたのである。それでも平助はさすがに武芸のたしなみがあるらしく、相手を土の上にねじ伏せて、雪駄せったをぬいで続け打ちになぐり付けた。

「河童野郎。八丁堀へでも、葛西かさいの源兵衛堀へでも勝手に行け。おれ達は渡り奉公の人間だ。万こと一事が露ばれたところで、あとは野

となれ、屋敷を追ん出ればそれで済むんだ。口惜しけりやあどう
ともしろ」

着物の泥をはたいて、平助は悠々と立ち去ってしまった。なぐ
られて、毒突かれて、提重の色男は意気地もなく其処に倒れてい
た。

「大哥、ひどく器量が悪いじゃあねえか」と、半七は溝から這い
あがって声をかけた。

「なにを云やあがるんだ。うぬの知ったことじゃあねえ」と、又
蔵は面を膨らせて這い起きた。「ぐずぐず云やあがると今度は汝
が相手だぞ」

「まあ、いいや。そんなにむきになるな」と、半七は笑った。

「どうだい、縁喜えんぎ直しに一杯飲もうじゃねえか。火消し屋敷で一度や二度は逢ったこともある。まんざら知らねえ顔でもねえ」
手拭をとった半七の顔を、月の光りに透かしてみても又蔵はおどろいた。

「や、三河町か」

四

あくる朝、半七は八丁堀の榎原の屋敷へゆくと、けさも杉野の用人の角右衛門が来ていた。忠義一途の用人は、きのう中にすこしは何かの手がかりは付いたかと問い合わせに来たのであった。

あまり性急だとは思ったが、相手がまじめであるだけに、榎原もまじめで云い訳をしているところへ、丁度に半七が顔を出した。

「御用人もしきりに心配しておいでなさる。どうだ、少しは当りが付いたか」と、榎原はすぐに訊いた。

「へえ。もうすっかり判りました。御安心なさいまし」と、半七は無雑作むぞうさに答えた。

「判りましたか」と、角右衛門は膝を乗り出した。「そうして、若殿はどこに……」

「お屋敷の中に……」

角右衛門は口をあいて相手の顔をながめていた。榎原も眉を寄せた。

「なに、屋敷の中にいる。それは又どういう訳だ」

「お屋敷の中小姓に山崎平助という人がございました。このあいだの朝、若殿様のお供をして行った人です。その人はお屋敷のお長屋に住まっている筈ですが……」

角右衛門は機械的にうなずいた。

「そのお長屋の戸棚のなかに若殿様は隠れておいでの筈です。三度の喫り物は、提重のお安という女が重箱あがに忍ばせて、外から毎日運んでいるそうです」と、半七は説明した。

併しその説明だけでは、二人の腑に落ちなかった。榎原は又きいた。

「なぜ又、若殿をそんなところに隠して置くんだらう。一体、誰

がそんなことを考えたんだらう」

「それは奥様のお指図のように聞いています」

「奥様……」と、角右衛門はいよいよ呆れた。

すべてが余りに案外なので、いろいろの経験に富んでいる榎原も煙けむにまかれたらしく、大きい眼を見はったままで木偶でくのように黙っていた。半七はつづいて説明した。

「まことに失礼でございますが、お屋敷は朝顔屋敷……朝顔を大層お嫌いなさるよう承つて居ります。そのお屋敷のお庭にことしの夏、白い朝顔の花が咲きましたそうで……」

角右衛門は苦にがい顔をして又うなずいた。

「つまりその朝顔の花が今度の事件の起りでございます」と、半

七は云った。

朝顔の花が咲けば必ず家に凶事があるというので、屋敷の人達も顔を陰らせた。主人はあまりそんなことに頓着しない気質であるので、ただ笑って済ませてしまつたが、奥方はひどくそれを気に病んで、なにかの禍いが必要ならばよいと明け暮れに案じているうちに、先月の末、些細なことから奥方の神経をおびやかすような一つの事件が^{しゅつたい}出来た。

ある日のことである。若殿大三郎が中間の又蔵を供に連れて、赤坂の親類をたずねた。その帰りに自分の屋敷の近所まで来ると、そこに三四十俵から五六十俵取りぐらいの小さい御家人たちの組屋敷があつて、十二三を^{かしら}頭に四、五人の子供が往来に遊んでいた。

遊びに夢中になつてゐる一人の子供は、駈け出すはずみに大三郎に突き当つて、ふたりは折り重なつて路傍に倒れた。もともと悪意でないことは判つていたが、供の又蔵は主人を突き倒されたのと、相手がしょうしんもの小身者の子供であるという軽侮とで、その子供の襟髪を引つ掴んでいきなりばかりばかりなぐりつけた。これは無論に又蔵の仕損じであつた。かれ等はともかくも武士の子である。理非もただ糺さずにみだりに人を打ちようちやく擲するとは何事だといきまいた。もう一つには、こつちが相手を小身者と侮ると同時に、相手の方では大身に対する一種の妬みとひが僻みがあつた。彼等はすぐに組中の子供を呼びあつめて、めいめい木刀や竹刀しな刀を持ち出して、およそ十五六人がとき鬨を作つて追つて来た。その中には、かれらの

兄らしい青年がたんぽ槍を搔い込んでいるのもあった。これには又蔵もぎよつとした。さりとして今更あやまるのも業腹ごうはらだと思つたので、かれは幼い主人を引き摺つて一生懸命に逃げ出した。追いかけて来た子供たちは杉野の門前で口々に呶鳴つた。

「おぼえていろ。素読吟味のときにきつと仕返しをするぞ」

玄関へ転ころげ込んだ大三郎の顔色はまつ蒼であつた。それが奥方の耳にもきこえたので、彼女の尖つた神経はいよいよふるえた。かの子供たちはみな来月の素読吟味に出るのである。由来聖堂の吟味に出た場合に、大身の子と小身の子とはかくに折り合いが悪い。大身の子は御目見おめみえ以下の以下をもじつて「烏賊いか」と罵ると、小身の方では負けずに「章魚たこ」と云いかえす。この烏賊と章魚と

の争いが年々絶えない。ある場合には掴みあつて、係りの役人や
付き添いの家来どもを手古摺らせることも往々ある。双方が偶然
に出逢つてもそれであるのに、ましてや相手が意趣を含んで、最
初からその仕返しをする覚悟で待ち構えていられては堪まらない。
いつの吟味の場合でも、大身の章魚組は少数で、小身の烏賊組が
多数であるのは判り切っている。殊にこつちの伴がきがさ気嵩のたくま
しい生まれつきならば格別、自体がおとなしいきやしや華奢なたち質である
だけに、母としての不安は又ひとしおであつた。ことしの朝顔は
確かにこの禍いの前兆に相違ないと恐れられた。

すでに吟味の願書を差し出したものを、今更みだりに取り下げ
ることは出来ない。たといその事情を訴えたところで、夫が日頃

の気性としてとても取り合ってくれないのは判っているので、奥方は一人で胸を痛めた。そのうちに吟味の日がだんだんに迫ってくる。苦労が畳まって毎晩いやな夢を見る。神籤みくじを取れば凶と出る。奥方はもう堪まらなくなつて、何とかして吟味に出ない工夫はあるまいかと、家来の平助にそつと相談した。

女の浅い知恵と中小姓の小才覚とが一つになつて、組み上げられたのが今度の狂言であつた。又蔵もこの事件には関係があるので、否いやおう慮なしに抱き込まれた。おとなしい大三郎にはよく因果を云い含めて、途中からそつと引返して来て、夜のあけないうちに平助の長屋へ連れ込んだのである。そうして好い頃を見計らつて再び大三郎を引張出し出して、例の神隠しといつわつて内外

の眼を晦くらまそうという魂胆であつた。その秘密の仕事を請け負つた二人に対して、奥様の手もとからは二十五両の金包みが下がつたのであるが、狡猾な平助はまずそのうちから十五両を天引きにしてしまつて、残りの十両を又蔵と二人で山分けにしたのであつた。

「これだけの仕置しおきをさしておいて、二人あたまに十両はひどいと、又蔵は不平らしく云つた。

「でも仕方がねえ。大根おおねは貴様から起つたことだ」と、平助はなだめた。

それでも又蔵は平助の着服をうすうす察しているので、いろいろの口実を作つて後ねだりをしたが、彼よりも役者が一枚上であ

るだけに、平助は^は刎ね付けて取り合わなかった。又蔵は^{いまいま}忌々しいのと、一方には提重の女からいじめられる苦しさで、だんだん強^{こわもて}面に平助に迫るので、こちらもうるさくなつて来た。

「なにしろ長屋でがあがあ云つちやあ面倒だ。今夜お堀端で逢うことにしよう」

二人は日の暮れるのを合図に堀端で出逢つた。その結果はかの掴み合いになつたのである。半七はそれから又蔵をだまして近所の小料理屋の二階へ連れ込んで、カマをかけて訊いてみると、又蔵は口惜しまぎれに何もかもべらべらとしゃべつてしまつた。

「まあ、こういう訳なんでございますから、どうかその思^{おぼしめ}召しで……」と、半七は云つた。

「なにしろ奥様も御承知のことですから、あまり荒立てると又面倒でございましょう。なんとかあなたのお取り計らいで、そこを円く済みますように……」

「いや、いろいろ有難うござった」と、角右衛門は夢の醒めたようにほつと息をついた。「それで何もかもわかりました。就いてはあとの始末でござるが、どういふふうに取り計らうのが一番穩お便んびんでござろうかな」

相談をかけられて、榎原もかんがえた。

「さあ、やはり神隠しでしょうかな」

この秘密を主人の耳に入れるのは良くない。どこまでも奥方の計画を成就させて、神隠しとして万事をあいまいのうちに葬って

しまう方がむしろ御家の為であろうと、榎原は注意した。

「成程」

角右衛門は厚く礼を述べて帰った。それから三日ほど経って、かれは相当の礼物をたずさえて榎原の屋敷へたずね来て、若殿大三郎殿は無事に戻られたと報告した。

「では、杉野の主人は結局なんにも知らずにしまったのですかと、わたしは訊いた。

「やはり神隠しということになってしまったのでしよう」と、半七老人は云った。「しかし用人や山崎に睨まれて、又蔵はどうも居ごこちが悪くなったと見えて、なにか屋敷の物を持ち出して、

提重のお安という女と駆け落ちをしてしまったそうですよ」

「山崎の方は無事に勤めていたんですか」

「それがね。なんでも一年ばかり経ってから、主人に手討ちにされたということですよ」

「神隠しの秘密が露顕したんですか」

「そればかりじゃありませんまい」と、半七老人は苦笑いをした。

「旗本屋敷の渡り奉公なんぞしている者はどうも悪い奴が多うござんすからね。こいつらに弱味を掴まれて、執念ぶかく食い込まれると、飛んだことになりますよ。山崎は手討ちになって、奥様は里へ帰されたそうです。子ゆえの闇から悪い奴に魅みこまれて、奥様も一生日蔭の身になってしまったんです。考えてみると可哀

そうじやありませんか」

「そうすると、朝顔は息子より阿母おつかさんに崇たたつた訳ですかね」

「そうかも知れません。その屋敷は維新後まで残っていました。が、いつの間にか取り毀こわされてしまつて、今じや細かい貸家がたくさん建つています」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」光文社文庫、光文社
1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5・86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：曾我部真弓

1999年8月28日公開

2012年6月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

朝顔屋敷

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>